



企業紹介

株式会社 平川鉄工所

信頼と技術で明日を創造



株式会社 平川鉄工所

1. 会社概要

名称	株式会社 平川鉄工所
創業	明治45年(1912) 4月
設立	昭和22年(1947) 1月
資本金	1億5千万円
代表者	取締役社長 平川恵一
従業員	260名
売上高	56億円
所在地	本社 大阪市北区大淀北1丁目9番36号
	支店 大阪, 東京, 名古屋
	営業所 札幌, 仙台, 金沢, 福岡, 鹿児島, 広島
	工場 滋賀
	サービスステーション (SS) 各地にあり (図3)
関連会社	(株)東京MPボイラエンジニアリング, (株)大阪MPボイラサービス, (株)平川製作所
事業内容	MPボイラ, 廃熱ボイラ, その他のボイラ, 省エネルギー装置, バーナ, 低NO _x 装置, マイコン, 圧力容器全般などの製造, 販売。ボイラ据付, 関連工事。

2. 会社の沿革

当社は明治45年に創立、終戦まではランカシアボイラ、コルニッシュボイラや機関車型ボイラなどを製造販売してきた。

終戦後はいち早く高圧電気ボイラや石炭燃焼装置などを開発するとともに、(株)平川鉄工所に改組。発電用や船舶協会等の溶接認可工場に

小林 廣*

なる一方で、昭和28年わが国初の炉筒煙管ボイラを開発して伊勢丹へ納入、以後常に炉筒煙管ボイラ開発の母といわれて業界をリードしてきた。

その間、MPボイラの特許取得、MP300, 500, 700, UR, 800, 2000, AD, ADW, などの各型式のシリーズを開発、同時にバーナもロータリ型や油圧噴霧型を開発して、ボイラとバーナのマッチングをはかり、NO_xなどの公害防止や省エネルギーの時代の要請にこたえてきた。

また昭和30年代後半からは大気汚染防止や排水処理などの公害防止装置の開発が要請され、これを開発、製造、販売して社会に貢献する一方、ボイラについても熱媒体ボイラや各種の水管ボイラ、さらに省エネルギー関連のドレン回収装置などや、排熱ボイラを各種開発、納入してきた。

その間には燃料も石炭から石油、そしてガスへ移るにつれて、それらに対応した燃焼装置を開発し、あるいは燃料に水を混合させてNO_xやばいじんを削減する乳化燃料製造装置や各種の低NO_xバーナを開発し、そしてそれらにマッチしたボイラを開発して、ボイラー筋の「信頼と技術のヒラカワ」を築いてきた。

その伝統はさらに続き、真空温水ボイラVECの開発や高性能炉筒煙管ボイラMPミニーの開発となり、またボイラのインテリジェント化に対応してマイコンやメカトロの技術を駆使しての賢いボイラの開発が続いている。

こうしてお陰様で地域冷暖房用ボイラでも高いシェアを誇り、またコ・ゼネレーション用やターボチャージャを使った過給ボイラなどの新しい開発が進められている。

3. 企業姿勢

*小林 廣(Hiroshi KOBAYASHI), 株式会社平川鉄工所, 取締役技術部長, 大阪大学工学部機械科卒

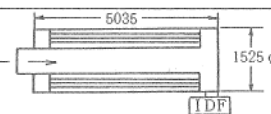
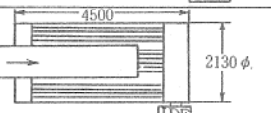
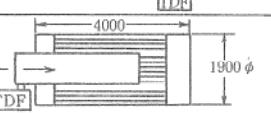
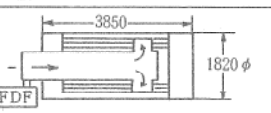
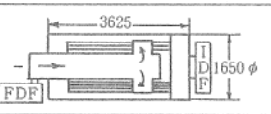
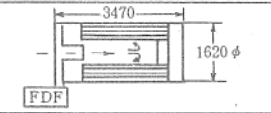
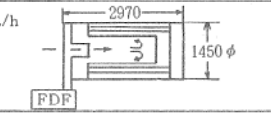
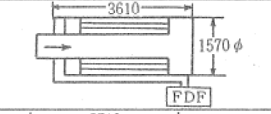
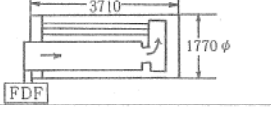
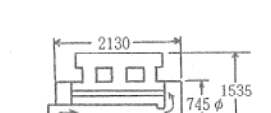
当社は、「信頼される会社、信頼される人間、信頼される製品」を社是として、「信頼と技術で明日を創造するヒラカワ」と、そして「安心と満足とを常にお届けするヒラカワグループ」を目標として努力している。

つまり当社の歴史が磨きあげた技術に、時代が求めるエネルギービジョンを加えて「信頼」をさらに高めるべく、技術の研究・開発とそれらによる社会へのサービスこそが当社の使命であると認識して、省エネルギーから創エネルギーへのトータルエネルギーシステムを提案してきた。ボイラについても沸騰器や蒸気発生機の

枠をこえて、エネルギー変換装置としての認識にたつて、これからの人類をアメニティの世界へお招きする、そういう快適エネルギーの明日を考える、インテリジェントで賢いボイラのヒラカワでありたいと願っている。

そこでそのような技術のヒラカワであるとともに、私達自身の意識をまず変革すべく、いろいろの活動を進めてきた。古くはムダ、ムラ、ムリをなくするZD（ゼロディフェクト）運動があり、1980年代に入ってからTQCをこえたGTV活動（全従業員のベクトルをあわせてムダ、ムラ、ムリをなくし、ビジョンをもって

表1 MPボイラの開発経過

開発年月	型式 (燃料)	蒸発量(EEt/h) (機種数) (ボイラ効率)	構造概要(EE 2.4 t/h相当)	伝熱蒸発率 (kg/m ² hr)
昭28.12	100 (重油 ガス)	0.5~7.66 (12) (重油85 ガス80)	但し EE=2.18t/h 	32.4~33.6
昭30.6	300 (石炭 重油 ガス)	0.42~7.5 (12) (石炭80 重油85 ガス80)		17.7~22.7
昭35.8	500 (重油 ガス)	1~10.5 (13) (87)		48~60.2
昭39.9	700 (重油 ガス)	1.2~10.8 (13) (87)		57.3~73.2
昭40.4	UR (重油 ガス)	1.6~10 (9) (87)		94.1~100.5
昭43.11	800 (重油 ガス)	1.2~15 (14) (88~90)		85~100
昭46.9	2000 (ガス)	2.0~25 (8) (88~90)	但しEE=2.0t/h 	89~110
昭54.9	AD (重油 ガス)	1.2~30 (13) (88~90~92)		77~102
昭56.6	ADW (重油 ガス)	1.2~24 (12) (88~90~92)		69~106
昭57.10	ミニ (重油 ガス)	1.2~24 (5) (88~92)		153~286
昭59.9	ミニ (ガス)	0.75~2.4 (7) (88~90~92)		

進む全社運動)へと進み、そして今や社長自らが先頭にたったSMS(シンクロナイズドマネージメントシステム—全員の同期化)運動へと進んで、その成果が出てきている。

4. 当社の製品紹介

当社の製品や業容の一部を紹介させて頂く。

表1は当社の炉筒煙管ボイラの開発経過を示す一例で、同じ蒸発量(換算)2.4t/hのボイラの直径と長さの時系列経過である。30年の間に長さが半分以下に、性能(伝熱面蒸発率)は10倍近くになったことがわかる。

当社のボイラには、形式に炉筒煙管式や水管式などがあり、蒸気ボイラや温水ボイラや熱媒体ボイラなどがあり、燃料やバーナ型式など、それこそ種々雑多であるが、その用途は空調冷暖房用と産業用に大別され、ほぼ半々というところである。図1はそのうちの炉筒煙管ボイラの需要家の業種別分類を示す。

図2は、その需要家の中でも大きい部類に入る熱供給事業に使われている地域冷暖房用ボイラの例で、その地区数を示す。日本の熱供給は昭和45年にはじまったが、その後毎年のように増設されて、現在では全国で32事業者、53供給地区(昭和62年7月現在)があり、当社はその60%に納入させて頂いている。今後も全国で都市再開発などの開発が進められており、その増設が期待されている。写真1は東京赤坂地域冷暖房用ボイラである。

図3は「安心と満足をお届けするヒラカワグループのサービス体制」を示す。さらにきめ細かいサービスができるように、24時間体制の整

備や地域の拡大、サービス拠点の増加をはかっている。

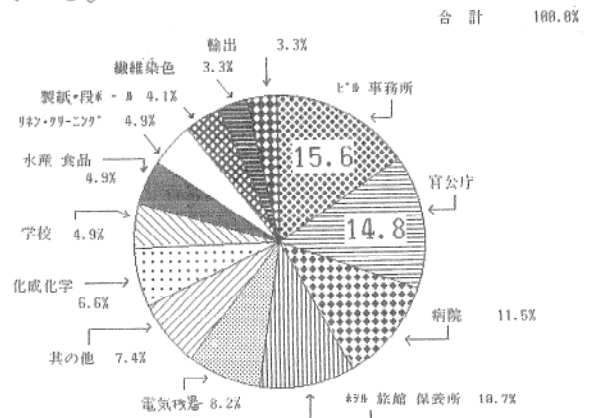


図1 炉筒煙管式ボイラ業種別納入分類

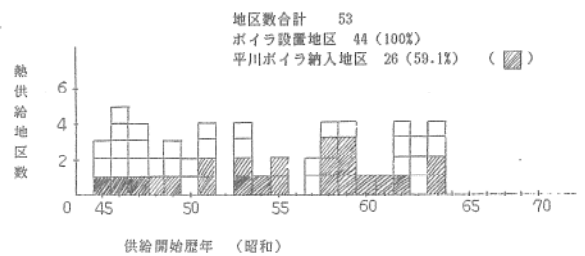


図2 熱供給地区数の推移

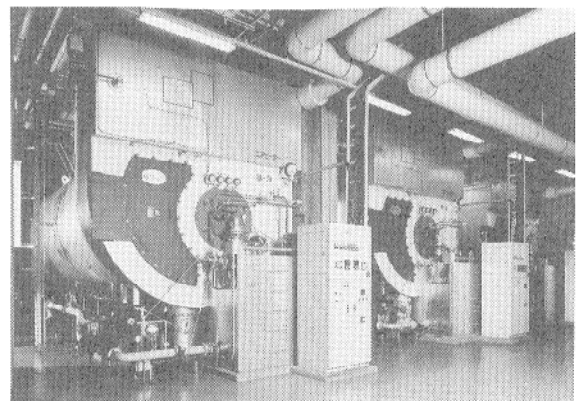


写真1 赤坂地域冷暖房用ボイラ

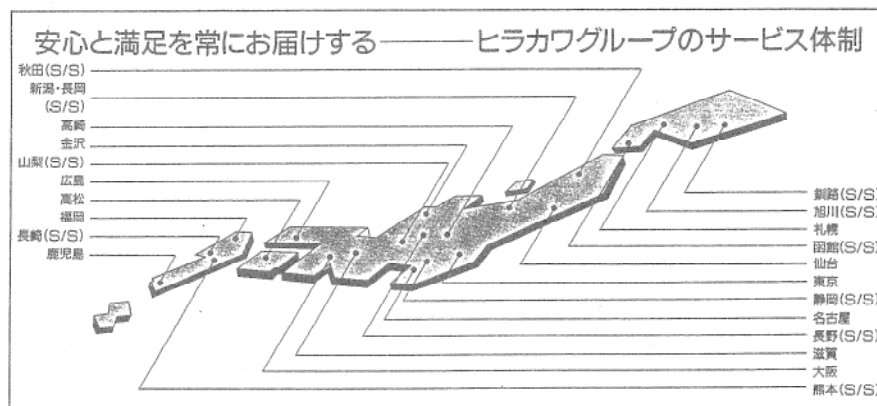


図3 ヒラカワグループのサービス体制

4. あとがき

当社は平成4年(1992)には創業80周年を迎える。

熱源装置として、またエネルギー変換装置としてのボイラの多様化に対応して、ますます重

要になってくるエネルギー問題に向って真正面から取り組んで行き、21世紀に向けての平成期の夢のボイラを実現することによってより快適な人類社会に貢献したいと考えている。

